

話 題 化

高 安 和 子

はじめに

文の話題の役割を担う要素が、主語の前の位置を占める構文が、英語に存在する。生成文法の枠組みによって、主節および埋め込まれた節における話題化の分析について検討し、その問題点を考察するのが、本稿のねらいである。

1. 話題化

Gundel(1977)は、話題を文の中で伝えられる前提とされている情報、与えられている情報、既知の情報としてとらえている。また、一般的には、英語の語順は固定化しているが、表面上の主語として機能する要素以外の要素が文頭の位置を占め、その要素が休止によって文の残りから離されることがよくある構文の存在を指摘している。下記の(1)から(4)の文において、*Beans*, *Tomorrow*, *That stupid excuse*, *Mary*が、それぞれの文の主語の前の文頭の位置を占めている。¹⁾

- (1) *Beans* he won't eat. (Gundel 1977:18)
- (2) *Tomorrow* I won't be here. (ibid.)
- (3) *That stupid excuse* I don't think anyone will fall for. (ibid.)
- (4) *Mary* I don't like. (ibid.)

Gundelは、更に、英語には話題を文頭の位置か、または話題が文の残りから離される位置に置く傾向があると述べている。

Ross(1967)は、(1)のような文は話題化(Topicalization)という規則が適用されて生成されるとする。(5)から(10)の文は、話題化が適用され、文中の名詞句が抜き出され、文頭に付加された結果、生成されたものであると分析することができる。²⁾

- (5) *These steps* I used to sweep with a broom. (Emonds 1976:31)
- (6) *Each part* John examined carefully. (ibid.)
- (7) *Our daughters* we are proud of. (ibid.)
- (8) *Poetry* we try not to memorize. (ibid.)
- (9) *Inflation*, I've heard many theories about. (McCawley 1988:503)

(10) *Harriet* I spotted yesterday at the movies. (Soames & Perlmutter 1979:229)

2. 話題化された要素の位置

第1節において、話題化された要素は文頭の位置を占めると述べた。

(11) *John* he called. (Gundel 1977:133)

(11)の文で話題として働いているのは、文頭の位置を占めるJohnである。話題のJohnは、話題化が適用される前は、他動詞calledの目的語の位置を占めている。(11)の文は、主節の要素が話題化される場合、その要素は同じ主節の文頭の位置に移動されるということを示している。(12)の文の他動詞calledの目的語のJohnに話題化が適用された結果、(11)の文において話題として機能しているJohnは、(12)と同じ主節の文頭の位置を占めている。

(12) He called John. (ibid.)

従属節を含まない単一の節においては、話題として働く要素は、その節、言い換えると主節の文頭の位置を占めることが観察される。

(13) *Of himself* Heraclitus no doubt had quite a good opinion. (Gundel 1977:133)

(14) *The cheese* I already ate. (ibid.)

(15) *About his life* we know little of interest. (ibid.)

(16) *Him* I can't stand. (ibid.)

(13)から(16)までの文において、文頭の位置を占める句が、それぞれの文の、この場合も主節の話題として働いている。

話題化された要素が、話題化が適用される前に占めていた位置を含む節と同一の節の頭の位置、つまり文頭の位置を占めることを示したが、次に、従属節、言い換えると埋め込み節を含む文の場合を観察する。

(17) *Stuffed eggplant* Jill says she can't stand. (Soames & Perlmutter 1979:234)

(17)の文は、*she can't stand* という埋め込み節を含んでいる。(17)の文で話題として機能している構成素は、最上位の節、つまり主節の文頭の位置を占める名詞句の*stuffed eggplant*であるが、Ross (1967)で提案された話題化の定式化に沿って分析をすると、この名詞句は話題化が適用される前は、下位の埋め込み節の動詞*stand*の目的語の位置を占めているものである。(18)から(22)の文においても、主節の文頭の位置を占める句は、この埋め込み節を含む文全体の話題として働いているが、最も埋め込まれている節の動詞、あるいは前置詞と関連付けられるものである。

(18) *Criticizing herself* I think Sue finds difficult. (Soames & Perlmutter 1979:236)

(19) *A kangaroo* Jim claims he has never seen. (Gundel 1977:133)

(20) *That paper on topicalization* Max told Sheila not to tell anyone he had written. (ibid.)

(21) *Cigarettes* I don't think I'll ever be able to give up. (ibid.)

(22) *The letter* Mary said Bill claimed he knew nothing about. (Gundel 1977:145)

これまで観察してきた話題化構文は、話題として機能している構成素が、主節の動詞と関連付けられるものであれ、埋め込み節の動詞と関連付けられるものであれ、その話題の構成素は、最上位の節である主節の文頭の位置を占めるものである。話題化構文の中には、このようなタイプの他に、話題として働く要素が、主節ではなく、埋め込み節の中に出現するものがある。

(23) I hope that *this book* you will read. (Doherty 1997:200)

(24) She claims that *Guinness* he likes but that *whiskey* he hates. (ibid.)

(25) This proves that *Joyce* he'd read but that *Yeats* he hadn't. (ibid.)

(26) I'm fairly sure that *the skates*, John put in the closet. (McCawley 1988:468)

(27) I believe that *this book*, you should read. (Lasnik & Saito 1992:76)

(28) I suspect that *the revised edition* he hasn't yet read. (Huddleston 1984:455)

(29) I admitted that *yesterday*, I had seen Fred. (Culicover & Wilkins 1984:71)

(30) John says that *Sue*, Bill doesn't like. (Authier 1992:329)

(23)では、埋め込まれているthat節の動詞readと関連付けられる名詞句のthis bookが、話題化によって、最上位の主節ではなく埋め込まれているthat節の主語の前の位置を占めている。同様に、(24)から(30)でも、埋め込まれているthat節に関連付けられる構成素のGuinness, whiskey, Joyce, Yeats, the skates, this book, the revised edition, yesterday, Sueが、それぞれ、埋め込まれているthat節の主語の前の話題の位置を占めている。

Doherty (1997)は、話題として働く要素が、埋め込まれている節に関連付けられている場合は、補文標識のthatを省略することができないと述べている。³⁾

(31) *I hope *this book* you will read. (Doherty 1997:201)

(32) *She claims *Guinness* he likes but *whiskey* he hates. (ibid.)

(33) *This proves *Joyce* he'd read but *Yeats* he hadn't. (ibid.)

3. 話題化構文の派生

3. 1. 話題の位置とwh移動

話題化構文は、話題として働く要素が、英語の標準とされる語順の中で占める位置、別の言い方をすると、その構成素が他の構成素と文法上密接に関連付けられる位置から抜き出され、最初に占めていた位置より上位の位置を占めている構文であるといえることができる。話題化構文の派生について、Chomsky(1977)は、話題として働く要素は、表面上占める位置に、移動規則ではなく基底部規則によって生成されると考える。⁴⁾

$$(34) \quad R1 : \bar{S} \longrightarrow \text{TOP } \bar{S}$$

$$R2 : \bar{S} \longrightarrow \text{COMP } \left\{ \begin{array}{l} \bar{S} \\ S \end{array} \right\}$$

話題化された要素は、基底部規則R 1 のTOPの位置に生成されるということである。話題化構文の派生には、(34)の基底部規則だけではなく、(35)のwh移動という移動規則も関与していると主張する。

(35) wh句を補文標識の位置に移動せよ⁵⁾

(36)の話題化構文には、このwh移動規則が適用されているとする。

(36) *this book*, I asked Bill to get his students to read

(36)においては、名詞句の*this book*が話題として機能している。(36)の基底部構造(37)に含まれるwhatにwh移動規則が適用されて、(38)の構造が派生する。(38)の派生構造においては、wh句のwhatが、補文標識COMPの位置を占めている。

(37) *this book*, I asked Bill to get his students to read what

(38) [\bar{S} [TOP *this book*] [\bar{S} [COMP what] [I asked Bill to get his students to read *t*]]]

(38)のwh句に、義務的な規則であるwh句削除規則が適用される結果、(36)の話題化構文が派生すると分析されている。さらに、埋め込まれている節の中に、話題として働く要素が存在する(39)についても、同様に分析されている。⁶⁾

(39) I informed the students that *this book*, they would definitely have to read

(39)においては、埋め込まれているthat節の主語のtheyの前の名詞句*this book*が、話題として働いている。

Chomsky(1977)は、話題化構文には、(40)から(43)までに示されたwh移動規則が持つ特徴が認められるので、話題化構文の派生には、移動規則であるwh移動が関与していると分析している。⁷⁾

(40) 空所(gap)を残す。

(41) 橋(bridge)がある場合には、見たところ、下接の条件(subjacency condition)、命題島条件(propositional-island condition)、指定主語条件(specified subject condition)に違反しているように見える。

(42) 複合名詞句制約(complex noun phrase constraint)に従う。

(43) wh島の条件(*wh-island constraint*)に従う。

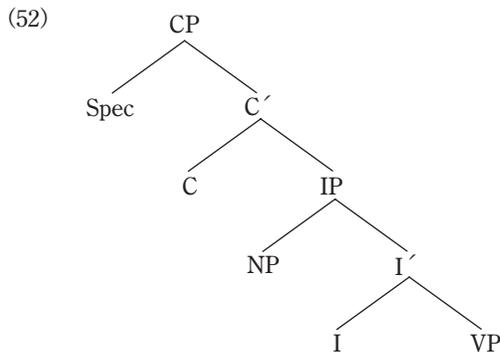
3. 2. 補文標識句の内部構造

英語の節の主語の前の周辺部(periphery)には、話題として機能する要素以外に、that補文標識と否定句と疑問詞が出現する。

- (44) *John*, I like. (Lasnik & Saito 1992:75)
 (45) *Those people* I've had just about enough of. (Soames & Perlmutter 1979:229)
 (46) I believe that *this book*, you should give away. (Chomsky 1977:93)
 (47) It is obvious that *Bill*, Mary dislikes a lot. (Culicover & Wilkins 1984:71)
 (48) *In no circumstances* can I tolerate this. (Hurford 1994:136)
 (49) I promise that *on no account* will I write a paper during the holidays. (Haegeman & Guéron 1999:337)
 (50) *Whom* will Thelma meet after lunch? (Haegeman & Guéron 1999:170)
 (51) They asked me *what* I was doing. (Hurford 1994:115)

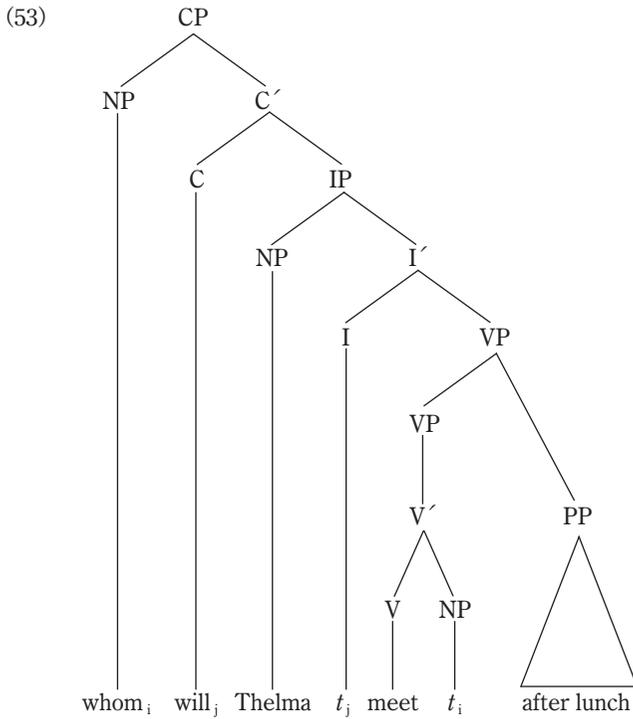
(44)と(45)の文では、主節の主語のIの前の位置を、話題化された要素である名詞句のJohnとthose peopleが占めている。(46)と(47)では、それぞれ、埋め込まれている節の主語youとMaryの前に、補文標識のthatと話題化されている要素である名詞句this bookとBillが存在する。(48)の主節の主語Iの前には、否定句in no circumstancesと助動詞canが存在する。(49)の埋め込まれている節の主語Iの前の位置には、補文標識のthatと否定句on no accountと助動詞のwillがある。(50)では、疑問詞のwhomと助動詞のwillが、主節の主語のThelmaの前の位置を占めており、(51)では、疑問詞のwhatが、埋め込まれている節の主語のIの前の位置に存在する。

Xバー理論と二項枝分かれ原理を採用すると、節の構造は(52)のように表示される。⁸⁾



英語の節の構造を(52)と仮定すると、文の主語は、IPが直接支配するNPの位置を占めることになり、主語の前には、補文標識句CPの主要部である補文標識Cの位置と、指定部(specifier)の位置の二つの位置が存在することになる。主節におけるwh疑問文(50)では、whomというwh句と、willという助動詞の二つの構成素が、主語に先行する。

(50)のwh疑問文の派生には、wh移動と主語・助動詞倒置(subject-auxiliary inversion)という二つの移動規則が適用されている。Haegeman & Guéron (1999)は、この二つの移動規則が適用された(50)に対応する派生構造を、(53)の樹形図で表している。

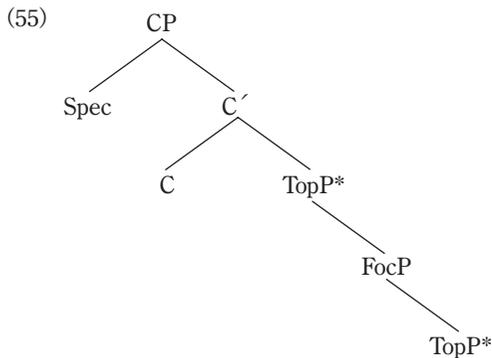


(53)の樹形図は、wh句whomが動詞meetの補部の位置から、CPの指定部の位置に移動し、助動詞willが、屈折句IPの主要部Iの位置から、CPの主要部Cの位置へ移動していることを示している。

(46)と(47)と次の(54)では、埋め込まれたthat節の中に話題が存在する。

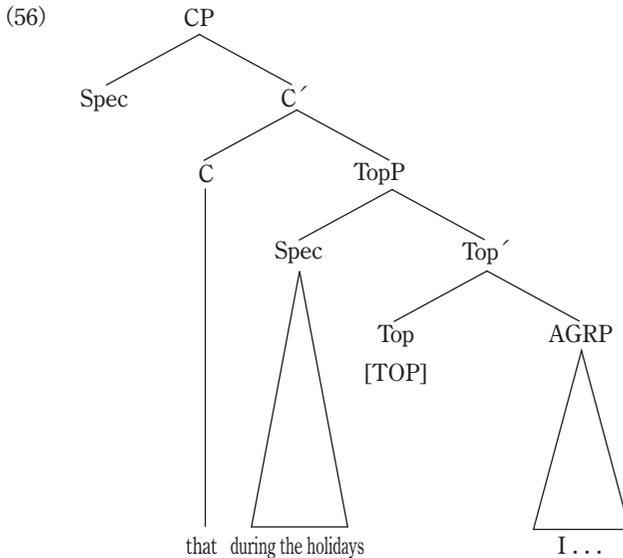
(54) I promise that *during the holidays* I will on no account write a paper. (Haegeman & Guéron 1999:339)

Haegeman & Guéron (1999) は、Rizzi (1997) で提唱された分離CP仮説に沿って、この言語事実を説明する。(54)のような文を説明するためには、CPが複数の機能投射に分解されている(55)の構造を設定する必要があるとする。



(TopP* は、TopPが繰り返すということを示す。)

話題句 (Topic Phrase) は文のCP層の一部であり、話題句の主要部である話題のTop (Topic) は、話題素性 (topic feature) を含み、TopPの指定部は、話題として解釈される構成素を含むとする。この補文標識句の体系を採用することにより、埋め込まれたthat節の中に話題を含む (54) の文の構造は、(56) であるとされる。



Haegeman & Guéron は、(54) の埋め込み節の前置詞句 *during the holidays* は、TopP の指定部の位置を占めると分析する。

英語には話題句と疑問詞 (wh 句) が共起する例が認められる。次に挙げる (57) と (58) では、話題句の *during the holidays* と疑問詞 *why* が、隣接して存在する。

(57) *During the holidays, why did they invite Tom?* (Haegeman & Guéron 1999:351)

(58) *I wonder why during the holidays they invited Tom.* (ibid.)

Haegeman & Guéron は (57) と (58) の間に観察される話題句と wh 句の順序の違いに着目する。(57) では話題句が wh 句に先行しており、(58) では wh 句が話題句に先行している。Haegeman & Guéron はこの順序の違いを、wh 移動によって移動する要素の移動先、言い換えると着地点の違いによって説明する。主節において wh 移動が適用されている (57) においては、wh 句は話題句 TopP によって支配されていると分析できる焦点句 FocP (Focus Phrase) の指定部に移動するが、他方、wh 移動が埋め込まれている節で適用されている (58) では、wh 句は CP の指定部に移動するため、主節と埋め込み節における話題の役割を担っている要素と疑問詞の順序の違いが生じると分析する。(57) の文頭に話題句を持つ主節では、wh 句が CP の指定部ではなく、焦点句の指定部に移動していると説明するのである。このように、主語ではなく話題

句が文頭に存在する主節で、wh句が焦点句の指定部の位置を占めると分析する根拠として、Haegeman & Guéron は焦点句の性質に言及する。wh句は、知られていない新しい情報を表すのが一般的であり、また、普通、焦点句の指定部は新情報を収容するとみなし、(57)のような主節の疑問文では、wh移動によってwh句が焦点句の指定部に移動するという仮説によって、(57)の話題句がwh句に先行するという話題句とwh句の順序を説明している。

Haegeman & Guéron は、wh句は知られていない新しい情報を表し、焦点句の指定部は新情報を収容すると述べているが、wh句がこの特徴を(57)の主節では示すが、(58)に含まれる埋め込み節ではなぜ示さないのかが問題となる。Haegeman & Guéron が述べるようにwh句が知られていない新しい情報を表すとすると、(58)のwh句も未知の新情報を表しているとみなすことができる。しかしながら、(57)と異なり(58)ではこの新情報は焦点句の指定部ではなく、CPの指定部にあるということになる。同じwh句によって表される新情報が、主節と埋め込み節では異なる位置を占めると主張されていることになる。したがって、(57)と(58)の話題句とwh句の順序の違いを、wh句が持つ情報についての働きによって説明する分析の可能性については、さらに検討の必要があると思われる。

4. 結論

本稿では、英語の話題化された表現が主節の最初の位置を占める場合と、埋め込まれた節に出現する場合の両方を検討の対象とし、補文標識句の内部の構造についての仮説を基にした話題化構文の分析の問題点を指摘した。

注

1. Gundel 1977:18
2. Ross 1967:232
3. Doherty 1997:200-201
4. Chomsky 1977:91
5. Chomsky 1977:85
6. Chomsky 1977:92
7. Chomsky 1977:86
8. Haegeman & Guéron 1999:171

References

- Authier, J.-Marc (1992) "Iterated CPs and Embedded Topicalization," *Linguistic Inquiry* 23, 329-336.
- Chomsky, N. (1977) "On Wh-movement," in P. W. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian, eds., *Formal Syntax*, Academic Press, New York.
- Culicover, P. W. and W. K. Wilkins (1984) *Locality in Linguistic Theory*, Academic Press, New York.
- Doherty, C. (1997) "Clauses without complementizers: Finite IP-complementation in English," *The Linguistic Review* 14, 197-228.
- Emonds, J. E. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*, Academic Press, New York.
- Gundel, J. K. (1977) *Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*, Ph.D. dissertation, Univ. of Texas at Austin.
Reproduced by Indiana Linguistics Club, Indiana.
- Haegeman, L. and J. Guéron (1999) *English Grammar*, Blackwell, UK.
- Huddleston, R. (1984) *Introduction to the Grammar of English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Hurford, J. R. (1994) *Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move α : Conditions on Its Application and Output*, The MIT Press, Cambridge.
- McCawley, J. D. (1988) *The Syntactic Phenomena of English*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Rizzi, L. (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," in L., Haegeman ed., *Elements of Grammar*, Kluwer, Dordrecht.
- Ross, J. R. (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT, The Linguistics Club of Indiana University.
- Soames, S. and D. Perlmutter (1979) *Syntactic Argumentation and the Structure of English*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, California.